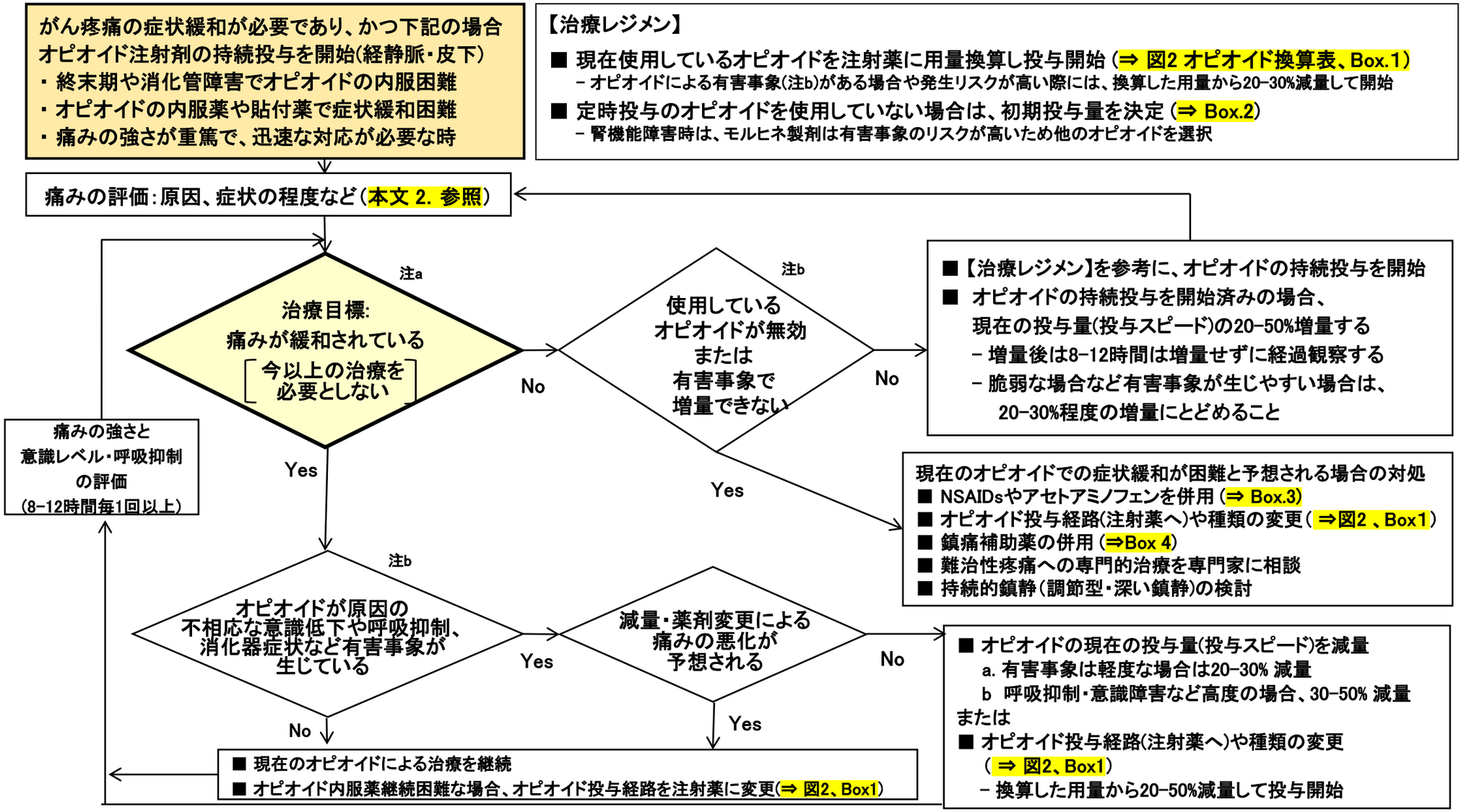
がん疼痛の体系的治療（アルゴリズム）オピオイド注射編　ver.1.0



痛みが強く、即時の対応が必要な際には、オピオイド持続投与1–2時間分量の早送りを行う(10–15分おいて繰り返し使用可能) 注c

注a: 除痛(痛みがない状態)が望ましいが、急激な薬剤の調整により有害事象が問題になる場合があり、症状緩和の程度と薬剤の有害事象のバランスを鑑みる必要がある。
治療を開始する段階で、症状緩和治療の第一段階の目標設定を行うこと(本文 2. 参照)
治療中も痛みの有無だけを質問するのではなく、痛みの程度や有害事象の状況などを評価する必要がある(本文 4. 参照)

注b: オピオイドによる眠気、呼吸数低下(10回/分未満)、活動性せん妄、ミオクローヌス、悪心/嘔吐といった有害事象への治療(対症療法、オピオイド減量など)は適宜行う

注c: 1時間量早送りのレスキュー効果が乏しいときには、呼吸抑制や眠気、悪心など有害事象の発生に注意しながら2時間分量早送りしてもよい